

Name: 長谷川 高矩

Title: : IBSB2011 参加報告

Report: 今回, ITP の支援に依って, 2012 年 7 月 23 日~26 日に USA/Boston で開かれた第 12 回 International Workshop on Bioinformatics and Systems Biology (IBSB2012)に参加する機会を得た. 私は 'Finding Extensions of Pharmacogenomic Pathways based on Structural Variations by Data Assimilation' という題目でポスター発表と 30 分の口頭発表を行い, 有益な経験を得ることが出来た. 今回発表した私の研究テーマは, 薬物の応答 pathway を従来の統計的アプローチではなく, 既存の pathway 情報から拡大・再構築しようとするものであり, 類似したテーマの研究が他国の研究者でも行われていることも確認出来た. それらの研究を通して, この研究をより実用的に発展させる為の具体的な糸口を掴むことも出来, 非常に有益な時間を過ごすことが出来たと確信している.

Bioinformatics の Workshop と言うことで, 各国共に Biology に対する Computational なアプローチを用いた解析を主としていたが, 日本以外の参加者では Biology の部分に比重を置いた研究が多いように感じ, また実際の生物学的発見に大きく寄与すると思われる研究テーマが幾つもあり, 刺激を促された. 特に Boston 大学は Broad Institute という共同研究機関を通じ, Genome Analysis 分野では世界最高レベルの研究結果を発表し続けており, 今回の発表の中でもそのレベルの高さを伺わせる研究が提供されていた. Biology と Computer Science を高いレベルで見事に統合し, チームとして高い研究成果を出す彼らのやり方には見習う部分が多くあると感じた. 私は学部時代の前半は Biology に集中して学んでいたが, 発展著しい Biology の最新技術・知見についてより深く学び直し, Information Science と統合することで, 最先端の研究を提供していこうと言う思いを抱くに至った.

また, IBSB では各国研究者・学生の交流を促進する為のイベントも開催され, 他大学の学生と積極的な交流が図れた. 彼らの研究に対する実直で熱心な姿勢も理解出来, 日本の代表的研究機関に在籍している者としても彼らに負けることなく学び, 研究成果を発表していかなければならないと感じた. 今回交流を得た研究者・学生とは今後も交流を続けていきたいと思う.

最後にこのような貴重な機会を提供して下さいました先生方, そして ITP に依る支援に, 心より御礼申し上げます.

Boston University

